

技術センターでは、映像や動画制作に関する技術相談や、人材育成のお手伝いをしています。今回は、それらの中から4つの相談事例をご紹介します。 <https://www.kptc.jp/gijutsushien/mov/>

E-ラーニングのための、ネット動画を作りたい

企業の人材育成で講習会を行っているA社から、都合で欠席した受講者がE-ラーニングとして後で見られるように、講義の様子をネット動画にして閲覧できるようにしたいという要望がありました。具体的には、ただ講師が話す様子を映すのではなく、講師の資料やパワーポイントを、ちょうどTVのニュース番組や天気予報のように、背景で合成した動画を作りたいという希望でした。また講義は毎回1カ所所ではなくさまざまな会場で行われるので、できれば、その場で収録したいが、機器に予算はあまりかけられないので、総予算を数十万円程度で実現したいとのことでした。

数万円の民生用ハンディカム2台と、最近需要が増えてきている十数万円の簡易型映像スイッチャー、映像記録と圧縮を同時に実現できる数万円のゲームレコーダー(映像録画機)など、それぞれ機器の仕様や役割と、映像技術について説明した上で、また実際の収録現場で、講師の背景に青、緑色等の無地で大きな布を準備することで映像合成が可能であることを伝え、これらを活用した収録システムを工夫し設計した結果、簡易・移動型合成スタジオとして、運用や映像制作が可能になりました。

また併せて、業務利用の映像制作に当たっては、音声を明瞭にすることが重要であることも伝え、今回は実運用を考えて講師に収録専用のワイヤレスマイクを使用することをすすめました。このケースでは毎回会場が変わるため、収録会場の近隣ですでに使用されているワイヤレスマイクの電波との混線を避けるとともに、連続の収録時間が2時間以内であることから、民生用機器として数万円で購入できるBluetoothタイプのワイヤレスマイクの使用を提案し、それらについても実現しました。

DVD-Video制作(プレス)時の課題解決をしたい

映像制作会社であるB社は、他社と共同で広範囲なロケ地をめぐる比較的規模の大きな映像制作をしましたが、DVDタイトル化するに当たり、プレス業者や販売関係者から、使用する映像圧縮ソフトの指定やデータエラーについて、同社が通常使用している手法では対応できない内容の要求があり、困っていました。



市販のソフトウェアの使用だけでは解りにくい、DVD-Videoの詳細な規格や仕様の内容、制作技術について説明するとともに、エラーの無い制作方法の実例や、当センターが保有する実績のあるプレスデータ作成業務専用のツールなどを活用して、共同制作各

社への同意や、関係業者へ納得のいく説明をすることで、販売用のDVDプレス(工場での量産)が実現しました。

自社内で制作する映像のナレーションをしてくれる人を探したい

映像機器を取り扱っているC社では、施工先等の顧客からの要望で、納品した機器で使用する映像の制作依頼を、社内で受けることがあります。その映像向けにナレーションをしてもらえ、できればプロか、同等の人を探しているが、今までC社では経験が無いので、その方法を教えてほしいという相談がありました。

作品ごとに、コマーシャル、ドキュメンタリーなど、制作する内容によって、その適正は変わるので、男女、声のトーンや雰囲気、演技の必要なセリフの有無などについて、今回求める仕様や詳細を聞きつつ、C社には、自らも顧客へその希望をリサーチするように促しました。

その上で、放送事業者やタレント事務所、アナウンス・声優学校などに照会をかけ、実績のある方にボイスサンプルをご提供いただき、収録時の拘束時間やギャラについて希望する範囲内で実現できるよう調整しつつ、マネジメントや進め方についても、今後C社の担当者が慣れるためのサポートとして、その都度作品に合った人をチョイスするノウハウなどを紹介しました。

展示会で使用する自社製品の映像を社内制作したい

主に工場のラインで使用する生産設備を製造しているD社では、自社製品のほとんどは顧客からのオーダー品です。ただし出荷した後、社内には図面しか残らないので、展示会やホームページなど映像を使用して紹介したいが、社員が撮影したものでは営業に使用できるレベルの映像が残せず困っていました。だからといって毎回出荷の度に専門業者に依頼できるほどの予算は無く、できれば社内で何とかしたいとの相談を受けました。

最終的な映像は、専門の映像制作会社に構成・編集をお願いするとしても、毎回出荷時の製品の稼働映像は、社員が撮影できるようにし、映像素材をデータベース化することを提案しました。また出荷前の製品の稼働状況をチェックする仮組立は、毎回同じ場所なので、そこにあらかじめ必要な照明や三脚、小型カメラなど撮影設備を備え、常設の撮影スタジオに改良してはどうかと提案しました。

動いているものを効果的に見せるためにはカメラは動かさず、固定して編集しやすい映像を撮影すること、また後で編集時に時間調節が可能のように録画スタート・ストップの前後を15秒程度余分に長く録画すること、機械が稼働する音が必要ならば、カメラのマイクではなく、会議室で使用しているようなマイクでも良いので別途用意して録音する(撮影に最適なカメラの設置場所が、必ずしも録音に最適な場所ではない)ことなどを周知することで、社員でも失敗しない映像素材の撮影ができるようになりました。